

祝・バレー部
第75回全日本高等学校
選手権大会出場

粘り強く、闘い抜いた、2年ぶりの春高バレー



今年度は1年生14名、2年生9名、3年生12名の総勢35名の部員が所属したバレー部。日吉会堂にバシンと力強い音が響き渡るアタックは圧巻。



左・「春高で勝ち進めるのは天地がひっくり返るほど難しい」と語る渡辺大地監督兼部長。次回はまた一歩前に進めるよう応援したい。右・今年度主将の山口快人君。1年生からレギュラーを務め、チームを牽引してきた。山口君を含め、今回活躍した3年生たちの夢は高鉢たちに託される。



主将の山口君が「ブロックを強化したい」と語り、この日もしっかり練習。春高1回戦ではその成果が現れ、何度も見事なブロックポイントを決めていた。

2 023年1月4日から開催された第75回全日本高等学校選手権大会、通称・春高の舞台に塾高バレー部が帰ってきた。2年ぶりの出場とあり、多くのバレーファンが手に汗を握りながら応援したことだろう。

今年度のチームは、春高神奈川県予選大会で見事優勝し、6年ぶりに神奈川県男子第1代表として春高への切符を掴んだことに加えて、昨年10月に開催された国民体育大会では、神奈川県代表として見事初出場を果たし、塾高バレー部史上にもその実績を刻んだ。

大躍進を遂げた一方で、その道のりは順風満帆とは程遠く、かつてないほど苦しい日々を経験したと渡辺大地部長は振り返る。「今年度のチームは2021年11月にスタートしました。最初は順調に仕上がっていたのですが、関東大会の予選を目前に控えた昨年の4月に、コロナによる活動停止期間が3回も続いてしまったんです。今も部員から一人でも感染者が出ると一週間活動停止になります。そのため、ほとんど練習ができないまま関東大会の予選に挑むことになりました」(渡辺部長)

関東大会予選は2位という結果を残したものの、練習不足からスタメンが定まらないままの状態が続いていた。その不安定な状態からメンバー間にも歪みが生まれ、ついには空中分解の



苦しい日々を乗り越えたからこそ、チーム力を高めることができた春高出場メンバーたち。

周囲の応援を力に変えて、
インターハイ、全国私学大会、国体優勝!
2年ぶりとなる春高の切符も掴み取った。



危機にも陥ってしまったという。「今の3年生は1年生の時に春高出場を経験していますので、春高に出たいという強い気持ちがありました。でもコロナによってなかなか練習ができなかったり、スタメンが決まらなかったりして、思うような結果を出せない歯痒さが募っていたと思います。それによってメンバー間の気持ちのずれ違いが生じてしまったんです」(渡辺部長)

混沌としたチームの空気を一新したのが、夏のインターハイ予選だった。結果はすべて勝ち越しの1位通過。念願だったインターハイ出場を決め、希望の光が差し込んだ。「ここで結果が出なければ今はなかったと思います」と渡辺部長が語るほど、苦しい状況乗り越えられたの

も、OBや周囲の応援あったからこそと主将でエースの山口快人君は振り返る。「1年生のときに春高に出場し、2年生からはレギュラーとして戦ってきましたが、昨年度はひとつも全国大会に行くことができず、とても悔しい思いをしました。思うような結果を残せない僕らに代わって、先輩やOBといった周りの人たちが諦めずに応援し続けてくれました。その温かい応援が力になったと思います」(山口君・3年)

今度こそ春高に出たい、そして周囲の人たちの期待に応えたいとチームの気持ちもまともになり始めたことで、インターハイ、全国私学大会、国体とすべての全国大会に出場を果たし、見事、春高の切符も掴み取ったのだ。

春高では史上初のベスト8が目標。山口君が「強豪校のブロックは高いので自分たちの攻撃が通らないことも多く、各大会での失敗を糧に修正してきました」と語る通り、1回戦の西原高校との試合ではその成果が現れたプレーで鮮やかな勝利を決めた。その勢いそのまま駒を進めて欲しいと誰もが祈る中、2回戦は県立岐阜商業高校と激戦の末、惜しくも敗退。しかし、試合中はリードされ苦しい場面でも、互いに笑顔で声を掛け合い、自分たちを鼓舞しながら懸命に戦う姿を魅せてくれた。結果は目標には届かなかったが、2年ぶりの春高というプレッシャーの中、戦い抜いてくれたバレー部。この経験を糧に、更なる躍進を期待したい。



取材を実施したのは春高直前の年末。ベスト8をかけてチーム一丸となり練習に励んでいた。